

# 経済学の起源とアウグスティヌス主義

——17世紀後半のフランス思想を中心に——

米田昇平

## I はじめに

スミスは人間の境遇改善欲求を所与として、この欲求に応えうる富の増大・「一般的富裕」の条件をおもに生産の部面で探求し、客観価値説や、節約・節欲の視点に基づく資本蓄積論に立脚して生産力の自己増殖（→資本主義社会の自律的発展）の論理を導き出した。このスミスの放った強烈な光によって、消費・消費欲求の意義が見えにくくなり、スミスを基準点にして経済学の生成を論じるとき、この側面が視野から遠ざけられがちとなったことは確かであろう。しかしながら、経済学の生成の条件としてまず注目すべきは、むしろ消費欲求の本源性への着目である。なぜなら、富裕の科学として経済学が生成する前提条件は、諸欲求の充足に世俗的幸福をみいだす功利主義的な幸福観とそれを容認する倫理が、広く人々の間に普及していることであつたと考えられるからである。言い換えれば、経済学の生成のためには、利益を求める欲求の存在としての人間の功利的情念が伝統的モラルの抑制を解かれ、境遇改善欲求を含めて富裕への願望を是とする価値規範が醸成されていなければならない。伝統的な神学的世界観からの切断によって生じた価値規範の空白を衝いて、一面では、欲求の満足による「生の充実」を容認する新たな世俗的倫理が生み出されていくが、このような舞台のダイナミックな変

転とともに、経済学の生成が促されていったと言えよう。

したがって、この変転がどのようにして生じたのか、このことの解明によって経済学が生成する重要な一場面が照らし出されることになる。注目すべきことに、教父神学の伝統への回帰を唱える峻厳なアウグスティヌス主義<sup>1)</sup>との関連で、この問題を論じた文献がいくつかみられるようになった。舞台は17世紀後半のフランスである。ここに生まれた新思潮のおもな特徴は、人間を自己愛・利己心に駆り立てられる欲求の存在であるとみなし、「利益」を求める人々の功利的情念はいかにして社会的効用を発揮して秩序の形成に寄与しうるか、という「情念と秩序」の關係に光をあてたところにある。そして、そこから生まれ出たのが、ボワギルベールとマンデヴィルの功利主義的な経済学である。彼らはともに功利的な人間像と社会像に立脚し、社会を「欲求の体系」と見立てて、生産に対する消費・消費欲求の規定性に着目し、消費主導論を唱えた。

この新思潮はまたヨーロッパ啓蒙の共通因子となって18世紀啓蒙の展開に大きな影響を与えた。例えば、アザールは、17世紀末から18世紀初頭にかけてのヨーロッパを、18世紀啓蒙に向かう時代精神のドラスティックな転換を準備した「ヨーロッパ精神の危機（1680～1715年）」の時代と捉えたが、このコンテクストの

重要な一要素としてフランスの新思潮に早くから注目していた (Hazard 1935)。他方で、最近になってロバートソンが述べたように、人間の生活状態の改善こそは啓蒙に共通する関心事であり、それゆえ啓蒙の中核をなすのは経済学にはかならないとすれば、この啓蒙の共通因子は同時に経済学の共通の母胎でもあり、ロバートソンが示唆しているように、この新思潮を媒介に啓蒙と経済学はストレートに結びついていると言える (Robertson 2005)。ただし、このような言い方は、とりあえずボワギルベールとマンデヴィルの経済学に限定して行うべきかも知れない。

いずれにせよ、17世紀後半のフランスの新思潮を源泉とする経済学の生成のあり方に着目することによって、経済学の生成と展開に関して、スミスを基準点とする従来のアプローチから導かれるものとは異なる展望をみいだすことができるであろう。以下で、この比較的新しい研究動向を紹介し、その意義や今後の課題を示そう。

## II 利益説とアウグスティヌス主義

秩序の形成のために情念をいかに制御するかという大問題に関して、情念によって情念を相殺するという見方に脚光を浴びせ、秩序形成の上で、「利益」を求める貪欲の情念はどのような役割を担われてきたかを浮き彫りにして注目されたのが、ハーシュマンである。経済的利益を追い求める貪欲は比較的無害な情念であり、野心や権力欲といったもっと危険な他の諸情念に対抗し、これを相殺する。そればかりか、「商業の時代」においては、おのずから経済秩序・経済法則が政治的秩序のあり方を規定するようになり、いわば「利益」への顧慮が愚かな専制政治の可能性を小さくすると考えられた。ハーシュマンはこのような考え方をモンテスキュー-スチュアート説と名づけている (Hirschman 1977, 93 / 訳 93)。一方、スミスはそのような商

業の効果に懐疑的であり、むしろ商業は奢侈や腐敗をもたらすとして近代商業社会に対する古典的な「共和主義的」見方を全面的に支持したとされる。そして、スミスの認識では、「人類の大部分を占める民衆」にとって「生活状態の改善」のために経済的利益を追求することがほとんど唯一の行動原理であるから、そこでは利益をもって他の諸情念に対抗させることは意味をなさなくなり、こうしてスミス以降は、個人的利益の自由な追求が一般の利益を増大するというスミスの命題が議論の焦点となっていく、としている (112 / 訳 113)。

人間の行動原理や社会の秩序原理を「利益」にみる、このような利益説へのハーシュマンの着目は、その後の思想史研究に影響を与えたが、ハーシュマンはその淵源を含めて利益説の歴史的展開の詳細を論じたわけではなかったから、これ以降、この利益説は様々な視点から吟味されることになる。Heilbron (1996) は、フランスのモラリストの思想的・文学的営為に即してこの利益説の淵源を明らかにしようとする。利益概念は、1500年から1700年の間に政治理論、自然法学、道徳哲学の三つの知的伝統のなかで磨かれてきたが、道徳哲学の領域でこれを最初に生み出したのは、モンテーニュに始まるフランスのモラリストの伝統であり、具体的には、それはペシミスティックなジャンセニズムの心理学と世俗の貴族モラリストとの交わり、あるいは両者の緊張関係のなかで生まれたとされる。そして利益説の普及に関しても、ジャンセニズムの主題を世俗化したラ・ロシュフコーなどのモラリストの役割を重視する。もともとフランスでは多彩な礼節のマナーを操る宮廷人の行為を理解するために、人間行動の心理学への特別の関心がみられたが、とくに、裏切りや背反に満ちていたフロンドの乱の後に、幻滅した貴族のモラリストによって「利益」を唯一の行動原理とする人間理解が普及することになったとしている。

1994年に、フランスのモラリストをめぐって、フランスとアメリカの研究者の間で「道徳から経済学へ」と題するシンポジウムが行われたが、このときのラフォンの報告(Lafond 1996a)は、経済学の生成に関する新たな研究アプローチがどのようなものか、その要点をよく示している。ラフォンは、「パスカル、ニコル、ラ・ロシュフコーといったジャンセニストのアウグスティヌス主義からバールやマンデヴィルのカルヴィニストのアウグスティヌス主義を経て、スミスの経済学に至る興味深い連続性が存在する」とした上で、利己心の自由によって最大の公共善がもたらされるという、その調和の観念はどこからきたかと問うて、「罪それ自体を普遍的善に転換するアウグスティヌス主義の不可思議な錬金術」にその由来をみいだしている(187)。愛徳を美徳の条件とする道徳の領域から、利己心の社会的効用の認識に基づいて経済学が自立するのを準備したのも、この錬金術ということになる。しかし、ラフォンは、悪の善への転換あるいは社会の自己調整は人間には自然や神の摂理の結果としかみえず、その内実は不可知であったとし、経済学は個人的エゴイズムの正当化の上に成立したが、この正当化それ自体は超越的な意志(神慮ないし見えざる手)に訴えることによってしか可能ではなかったと述べている(193-94)。こうして結局、ここではこの錬金術の秘密は不分明なままである。ただし、次にみるように、彼は別の論文で、アウグスティヌス主義とエピクロス主義との邂逅によって新たな倫理が生まれたとしており、そのかぎりでは錬金術をもたらしたのはこの「邂逅」であることになる。

### III アウグスティヌス主義とエピクロス主義の邂逅

18世紀のフランス功利主義(利益の道徳)の源流がジャンセニズムの道徳論にあることは、早くからマルセルによって指摘されていた。

マルセルは、18世紀のオプティミスティックな社会学の源泉は部分的には17世紀のベシミスティックなジャンセニズムの社会学に求められること、また「自己愛を徹底的に追い詰めようと腐心した(ジャンセニズムの)陰鬱なキリスト教道徳は、その反動として利益に立脚した道徳を生み出すのに寄与した」(Marcel 1957, 239)と述べていた。

これに対し、ラフォンは、17世紀のアウグスティヌス主義の道徳の転倒(→功利主義の道徳の成立)は、マルセルが言うような「反動」の結果として生じたのではなく、アウグスティヌス主義とエピクロス主義との邂逅によって新たな倫理が生まれた結果であると考え(1996b)。原罪思想に基づいて教父アウグスティヌスの原点への回帰を唱えるアウグスティヌス主義と、宗教に敵対的なエピクロス主義のそれぞれの立脚点はまさに正反対であるが、ラフォンによれば、人間の行動の動機を何より享楽や快楽への願望に求め、それを自己愛の発露とみる点で両者は共通しており、それゆえストア主義やセネカへの批判でも共通している。ある著者がセネカを攻撃するとき、それはアウグスティヌスの名前によってか、それともエピクロスの名前によってかを知るのは困難なほどである、とラフォンは言う(345)。そして、英雄的な夢と現実とを混同してその知的誠実さを疑わせるストア主義とは違って、エピクロス主義の真実は、それがもっぱら自己愛に支配される現実の人間の弱さに適合的な人間学に基づいているところにある。したがって、ラ・ロシュフコーやバールが眼前の事実すなわち「あるがままの事物」に忠実であろうとしたとき、エピクロス主義との邂逅が生じ、愛徳か絶望かの危険な選択を迫られることなく、愛徳がなくても存続しうる自己愛に基づく人間同士の絆の認識(新たな倫理)が生まれた、とラフォンはおよそ考えている。

フォースもまた、ラフォンと同じく利益説の

淵源をアウグスティヌス主義とエピクロス主義の利己心の学説にみいだす (Force 2003). (ラフォンが言うように) 立脚点が正反対のこれらの思潮は、しかし世俗に生きる人間を快樂に従属する存在として捉え、利己心の学説に立つ点では同じである。フォースによれば、「人間は各々自分自身の快樂によって導かれる」というヴェルギリウスの言葉は、ガッサンディやパスカルからバールやマンデヴィルに至るエピクロス主義者とアウグスティヌス主義者の共通のモットーであった (57). さらに美徳批判において、言い換えれば、ストア主義という共通の敵を持っていた点で、両者は同じ地平に立っている (59). 人間を徹底的に墮落した存在と捉えるアウグスティヌス主義者の目からみれば、ストア的美徳は「偽装された悪徳」にほかならないし、そもそも人間が神の恩寵なくしてみずからの自由意志によって徳に至ることなどありえない。また貪欲 (快樂の追求)こそが人間行動の唯一のエンジンと考えるエピクロス主義者にとっては、栄光の情念に基づくストア的美徳は欺瞞にほかならない。フォースは、エピクロス主義とアウグスティヌス主義の邂逅のあり方はマンデヴィルとバールの論説によく示されているとし、そして両陣営から投げられたこのような美徳批判に新ストア主義の立場から論駁し、マンデヴィルを批判したのが、ルソーとスミスであったとしている (63).

こうしてフォースは、エピクロス主義とアウグスティヌス主義をともに利益説の源泉と捉え、これらを新ストア主義と対置するが、彼にとっては「経済の近代的概念」および「自立した科学としての経済学の出現」をもたらしたのは新ストア主義の方である。彼によれば、スミスの体系は「ルソーをきわめて重要な対話相手」として成立し、シャフツベリーやバトラーと同様に、仁愛的な動機の結果と利己的な動機の結果の収斂 (徳と利益の収斂) を論じるなど、まさに新ストア主義の特徴を備えている。このこ

とを確認した上で、フォースは、アウグスティヌス主義・エピクロス主義と新ストア主義の二つの思潮の「神慮」の概念と、それぞれに親和的な自然学 (デカルトの渦動説とニュートンの万有引力説) を吟味する。そして、神慮による社会と宇宙の調和を強調し、求心力モデルとしてのニュートン力学と親和的な新ストア主義においてのみ「自立的な経済学の出現」が可能であったとする。これに対し、原罪説に忠実なアウグスティヌス主義においては<sup>2)</sup>、自己愛が作る社会は常に「カオスの淵にある、なぜなら利己心から社会秩序への道は協働を必要とする」が、「利己心に基づく協働は必ずや不安定」だからである (84-85). それゆえアウグスティヌス主義者は、社会秩序は「神慮」がもたらす「奇跡」であるとするか、あるいは遠心力モデルという常に不安定なデカルトの渦動説を応用して「相殺的情念」の論理を用いて説明するほかない。フォースはおよそ以上のように、新ストア主義に引きつけてスミスにおける経済学の成立を論じた。

*European Journal of the History of Economic Thought* 誌に書評を寄せて、このようなフォースの説を真っ向から批判したのが、ファッカレロである (Faccarello 2005). ファッカレロは、フォースがエピクロス主義・アウグスティヌス主義と新ストア主義の二つの思潮の区別に基づいて経済学の出現を跡付けようとしたこと自体は、「議論に値する」と一定の評価を与えている (ただしこの二つの伝統的思潮を厳密に区別することはできないとも述べている). しかしファッカレロは、デカルトの渦動説 (遠心力モデル) は不安定で、経済均衡を表現するモデルとしては適切ではないと考えること自体が間違っている、などとフォースの議論の前提を批判した上で、ピエール・ニコルの例を挙げ、むしろ「経済の近代的概念はアウグスティヌス主義にそのルーツを持つ」(709) と反論している。そして「私の考えでは、アウグスティヌス主義

の足もとでケネーやチュルゴがあとを継ぐことになる理論的ラインを真に創設したのは、ボワギルベールである」(710)と主張する。ボワギルベールは「相殺の情念」の観念や新ストア主義の調和の観念を用いることもなく、利己心に基づく自由な競争が経済均衡をもたらしうることを論証したのであった。

フォースはこの批判に対して、スミスの経済学はエピクロス主義・アウグスティヌス主義の伝統とは異なる新ストア主義の伝統に属することを改めて確認した上で、ストア主義のように安定的な調和的世界を前提にしないアウグスティヌス主義の伝統上に「経済科学」を構築することは困難であるとする自説を譲っていない(Force 2005)。結局、問題はボワギルベールの経済学をどのように評価しうるかであろう。ボワギルベールの論説に経済学の生成史上の画期的意義を認める立場から言えば、明らかに、ストア主義の伝統上においてしか経済学は生まれない、ということにはならない。このことを鋭く指摘したファッカレロにフォースは答えていない。なお、同じ誌上でHurtado(2005)はスミスとルソーの関係に焦点を合わせ、新ストア主義の路線で両者を括ること自体に無理があるとしている。また八幡(2006)は、スミスにはストア哲学に距離を置く側面もあり、あまりにストア主義にひきつけたスミス解釈には問題があるとし、「著者は…マンデヴィルとスミスの継承関係の側面を軽視」(168)していると批判している。

功利主義の人間観つまり経済人(ホモ・エコノミカス)の観念の生成に関して、ラトゥーシュも、「明らかにすべてはアウグスティヌス主義とともに始まる」(Latouche 2005, 118)とするが、ただし、彼はアウグスティヌス主義の影響を受けたラ・ロシュフコーなどのモラリスト自身が功利主義的であったわけではないことに注意を喚起している。ラトゥーシュは、「…結局、啓蒙思想家には、有効性や社会的効用の側面が考

慮すべき唯一のものに思える、したがって、社会に生きる人間を考察するとき、彼らは功利主義の採用へと導かれた」(Lafond 1992, xxv-xxvi)とするラフォンに同調して、有効性や効用に公共善をみる世俗の価値が次第に優勢になるにつれてペシミストはオプティミストに変わるが、「歴史的過程」とともに生じたこの転換が功利主義を生み出したと考える。墮落した人間の世俗の自己愛は、利益の自然的調和の神話のおかげで最後には原罪の汚名をそそぎ、悪徳は美德から期待される諸結果をもたらすことが論証されて、今後は悪徳と呼ばれてきたものを美德と呼ぶことが正当化される。こうして「ピューリタニズムとジャンセニズムは、…世俗化することによってアウグスティヌス主義の出発点とは正反対の帰結にたどり着いた。自己愛の告発からその称揚へと変化したのである」(136)。ラトゥーシュはこの転換の原因については、「神の栄光だけのために功績を積み重ねて信仰に生きることに嫌気がさして、ピューリタンやジャンセニストが地上のパラダイスを生きようと心に決めたとき、奇術が行われる」(140)と述べているだけで、ラフォンやフォースのようにエピクロス主義との邂逅をとくに問題にはしていない。しかしラトゥーシュにとって転換をもたらしたものは何より世俗化の現実であり、この現実にはエピクロス主義の傾向性と大いに関係していると考えれば、彼らの見方と大差はないようにみえる。

一方、この邂逅(あるいは「収束」)に着目して統一的な啓蒙像を結ぼうとしたのが、ロバートソンである。ロバートソンは断片化された啓蒙理解の現状への反省に立って、共通した特質を持つ単一の啓蒙事例を求める。そして人間の生活状態の改善への関心と、この課題に込めうる経済学との親和的な関係に啓蒙の共通性をみいだせるとし、さらにこの特徴は、アウグスティヌス主義とエピクロス主義との収束によって生じた17世紀後半のフランスの新思潮

に由来するとみるのである。彼は言う、「17世紀後半のフランス哲学の遺産への接近は、ナポリやスコットランドの思想家が彼らの国の当面の苦境に関する研究から関心を移し、啓蒙の知的探求の中心的課題となるものを研究しようになる上で決定的であった」(Robertson 2005, 46)。しかしロバートソンはその共通の源泉それ自体の探求に向かうことなく、社会的・政治的状况が類似したナポリとスコットランドにおいて、その源泉からどのような特徴的な流れが生じたかにもっぱら関心を向ける。彼が言うには、17世紀後半および18世紀初頭のナポリの知的文化は、近代フランス哲学やエピクロス主義の影響を強く受けていたが、ガリアーニとジェノヴェージは、さらにムロン経由で、フランスの新思潮に特徴的な人間本性の理解を受け継いだ。一方、スコットランドでは当初はその影響はほとんど感じられなかったが、ヒュームによるベールの発見によって、またマンデヴィルの論説を通じて次第に浸透していった、そしてヒュームが『政治論集』で経済学に向かったとき、参照したのは同じくムロンであった(375-76)。

このようにロバートソンは、スコットランドとナポリという二つの「国民的」コンテクストのなかに単一の啓蒙事例をみだし、その特徴をおもに、17世紀後半のフランスの新思潮を共通の源泉とし、自国が置かれた立ち後れた状態からの脱却という啓蒙の課題に対して、ともに経済学の認識によって立ち向かおうとしたところに求めた。フランスのムロンをキーパーソンとして重視しながら、その分析は十分ではないし、この新思潮のなかから登場したマンデヴィルと並ぶボワギルベールについての言及がなされていないのは、不都合であろう。またエピクロス主義に基づいて、人間の生活状態の改善という啓蒙の共通課題に応じるために経済学に向かうこと自体は、スコットランドとナポリに限られたことではない。奥田(2007)も、ス

コットランドとナポリの事例に基づくロバートソンの「二つのコンテクスト、一つの啓蒙」という主張自体に疑問を呈している。しかしともあれ、ヨーロッパ啓蒙の大きな視点からフランスの新思潮の歴史的意義を捉えうることを示した点で、ロバートソンは、この研究アプローチのメリットと今後の可能性を示したと言えよう。

#### IV ジャンセニズムとピエール・ニコル

これまでみてきたように、多様な要素からなるフランスのこの新思潮は、功利主義、さらには経済学の生成に向かう潮流へと繋がっていくことが認識されるようになった。そして経済学の生成との関連で言えば、以前から一部の研究者によって注目されていたのが、ジャンセニストのニコルである。例えば、Heilbron (1996)は、ニコルの著作は利益の概念の歴史において「ターニングポイント」となったとし(91)、「フランスの神学者、ニコルが商業社会に関する最初の一貫した正当化——それはさらに言えば、最終的にはドマ、ボワギルベール、ベール、マンデヴィルなどの著作を通じて自由主義や社会科学の中核的要素となるような正当化である——を現になしえたのはなぜだろうか」(78-79)と問題提起している。

ポール・ロワイヤル修道院に結集してジェズイットに対抗したジャンセニストは、アウグスティヌス主義の人間理解に忠実であったとしても、しかし他の側面を含めて考えれば、決して一枚岩であったわけではなく、個々に多様な思想傾向を持っていた。世間からの完全な隠棲を説くパスカルに対して、ニコルやドマは世俗の生活を徹底的に拒否することはせず、むしろアウグスティヌス主義を社会理論の領域(世俗社会における秩序原理の探求)に適用しようとした<sup>3)</sup>。

アダムの墮罪によって原罪を背負うことになった人間は徹底的に墮落した存在であり、そ

の行動原理はもっぱら自己愛であるが、この自己愛を規制し秩序形成を可能にする条件は何か、このような自己愛と秩序の関係こそがニコルにとって最大の問題であった。ニコルは理性によって統御された「開明的な自己愛」がもたらす「利益による秩序」の可能性に目を向ける。しかし彼はその論理を貫いたわけではなかった。罪深い人間の心底に刻まれた自己愛という悪が公共善に転化するのを最終的に保証しうるものは、為政者が神慮に基づいて案出し維持する力づくの「政治的秩序」のほかにはないと考えるからである。こうして、ニコルにおいて、便宜を求めてやまない人間の功利的行動は、宗教・政治の規範にしっかりと繋ぎとめられていたことになる。

ニコルの道徳論や社会理論を取り上げた研究の多くは、ニコルと脱世俗的な他のジャンセニストとの違いに目を向け、「利益」原理に基づく彼の秩序の論理に、功利主義の傾向や世俗的価値に寄り添うユマニズムの影響などを読み取っている。おそらく最初にニコルの功利主義の傾向を指摘したのは、ロスクラッグである。ロスクラッグによれば、ニコルにとって、自己愛は人間の行動の第一原理であり市民法の基礎であり、社会の秩序を形成するのも自己愛である。こうして「効用こそは、人間の行動規範が導きだされる唯一の基準であり唯一の源泉である」(Rothkrug 1965, 51)。他方で、ロスクラッグは17世紀末の反重商主義の改革運動の担い手の一人としてボワギルベールを取り上げ、彼の経済学は功利主義の哲学に立脚していること、効用に基づく富の観念や消費主導論はその反映であることを指摘している(358-64)。しかし残念ながら、同じ功利主義的な思潮のなかでニコルとボワギルベールとを関連づける視点はみられない。

ジェイムズはニコルをパスカルやドマと比較し、ドマに比べてニコルの社会観の基礎にペシミズムが存在することは否定できないにして

も、そのペシミズムはパスカルのそれほどは深くはないとする。ニコルにおいて、神と人間との架け橋は墮罪によって完全に破壊されたわけではないし、難破した人々を実際に大いに救ったのは人間の理性である。要するに、社会機構を維持する権力の強権的な活動が理性によって導かれるように、自己愛が支配するところでも人間理性が活発に作用し、人々を社会形成に向けて促すのである(James 1972, 161)。ニコルの『道徳論選集』を編んだティルアンは、その解説で、アウグスティヌス主義者は自己愛を徹底的に批判する傍らで、共同体の存続を可能にする社会道徳へと至る人間的徳の存在を認めている、というラフォンの見解(Lafond 1996a, 188)に同意し、非難されるべきニコルの自己愛は、しかし他方では「その性質上、商業的な世俗的徳」に道を開いていると考える(Thirouin 1999, 16)。ティルアンはさらに、ニコルの自己愛は社会道徳の源泉であるばかりか、そこに生まれる「礼儀や礼節」は宗教的な「救済のシステム」において一次的役割を果たしているとし、そこに「この異形のジャンセニストのおそらく決定的な確信がある」(16)とさえ述べている。

ベルジュールもまた、ニコルはユマニズムやトミズムによって深く影響されていたと考える(Berger 1981)。そして、とくにニコルの「祈りについて」の論説を取り上げ、世俗からの隠棲を説くサン・シランやパスカルとは違って、ニコルが、世俗のあらゆる職業労働は「祈り」を通じて聖化されるとして、日常の職業労働にある種の宗教的意味を与えようとしたところに、彼なりの世俗への関与の姿勢を読み取っている。ジャンセニズムの主題が社会理論へと適用されるのも、このような姿勢の延長上においてである。またニコルの政治的秩序は人間の情念を「調整」し「馴化」するから、マキャヴェッリやホップズのように平和を維持するために諸情念の抑圧が不可欠なわけではなく、一定の条

件のもとで貪欲は公共善に向かい、愛徳と同じ結果をもたらす。ベルジェールはそこに「自由主義の起源」(彼の論文の表題)をみいだす。なお、興味深いことに、彼は「信用でより高く売ることは高利であるか否か」というニコルの論説に注目して、そこに割引価値、迂回生産、機会費用の概念がすでにはっきりと認識されていることを指摘している。ただ、彼はデュモン(Dumont 1977)やハーシュマンに同調して、一方で経済学の生成におけるマンデヴィルの重要性に着目しながら、ニコルとマンデヴィルとの関係には触れていないし、ましてやニコルからボワギルベールへの影響関係は取り上げていない。

以上の見方は、もっぱらニコルと他のジャンセニストとの違いに着目してニコルの秩序の論理を説明しようとするが、これに疑問を呈したのがクレイである。クレイによれば、もともと世俗への関与に慎重なジャンセニスムの特質を考えれば、ジャンセニスムは世俗的な倫理に適合的であるとか、それに先鞭をつけたと言うことは困難である。しかし実際に、墮落した人間が社会や国家の外見の調和をもたらすという「パラドックス」が生じた。クレイは、この「神の驚くべき摂理」に起因するパラドックスの内的論理を、ニコルは、ユマニスムによって脚色することなく「謙虚と恐怖」のジャンセニスムの倫理によって説明しており、社会の自律性に関するニコルの論理はジャンセニスムそれ自体の論理とまったく整合的であったとしている(Kley 1988, 78)。

すでに要点を述べたように、ニコルにとって、秩序の最終的な規定要因は神慮に基づく「政治的秩序」である。これをどのように捉えるか、言い換えれば、ニコルの社会理論における神の位置をどのように考えるかは、言うまでもなく、ニコルの議論の歴史的意義を見定める上で重要な論点である。コーヘンは、ニコルが、自己愛はいかにして地上の国の平和と便益に貢献しう

るかの探求に向かうとき、「彼はアウグスティヌスからかなり遠ざかり、功利主義の方向に向いている」(Keohane 1980, 301)が、ただしこの方向は宗教の規範によってしっかりと繋ぎとめられていることを強調する。ニコルの政治的秩序ではホッブズのそれ以上に神が優越的な役割を担っており、神は統治のために選ばれた人々にみずからの力を伝え、そして神自身へのわれわれの義務の一部としてこの地上の主人に従うことを求める。またニコルが、権威に対する従順や地上の優越者の意志への完全な従属を特徴とする宗教的共同体を称揚していることにも注意を促している。ニコルによれば、われわれのうち少数者だけがこの地上で他人をいかに導くかに関する知識を神から与えられているから、残りの者は自分自身のやり方を見つけようとしなくて、彼らに従うべきなのである。こうしてみると、同じジャンセニスムの土壌から生まれたボワギルベールの「自由主義」の論説が、どれほど画期的なものであったかが明らかとなる。コーヘンによれば、「ボワギルベールは、もっとも慈愛に満ちた全知の権力者の手をもってしても、普通の人間が利己的かつ盲目的に自己利益を追求することでみずからのためになしうることを、彼らのためになしえないと主張することで、絶対王制の基礎を掘り崩した」(356-57)のである。

## V ニコルからボワギルベール及びマンデヴィルへ

ボワギルベールは幼少の頃、ポール・ロワイヤルの「小さな学校」で学んだ。彼の「不服従」の精神はその教育の結果であったと言われ(Hecht 1966)、彼自身がジャンセニストであったと目されることもある。ファッカレロは、デカルト、ボダン、ニコルやドマなどのジャンセニストの思想的影響を浮き彫りにしつつ、ボワギルベールがそのような17世紀以来の知的伝統からいかにして画期的な飛躍を成し遂げ、自

由主義経済学の創成へと至ったかを、おもに彼の均衡概念の詳細かつ包括的な分析によって明らかにした注目すべき研究であり、近年におけるボワギルベールの再評価を決定づけたと言っても過言ではない。ファッカレロは、ボワギルベールの想源として、とくにニコルとドマを重視し、「カソリックのなかでも最も禁欲的な解釈の一つから、自由企業経済の有効性に関する基本的観念が生まれ出る」(Faccarello 1986, 14) ことの逆説性に注意を促している。ニコルやドマは「利益による秩序」の可能性(利己的情念の効用)を示しながら、結局、秩序維持のために神の意志を反映した力づくの政治的秩序に頼らざるを得なかったのに対し、ボワギルベールは経済秩序の自律性の認識に基づいて「レセ・フェール」の秩序原理を提示した。ここに「ニコルやドマやあらゆるジャンセニスムの伝統は一拳に乗り越えられる」(228)、とファッカレロは言う。ここでは「国家と国民が混同されることはもはやないし、国王および国王がその頂点に位置するヒエラルキーが社会的紐帯を形成することももはやない。…ニコルにおなじみの『政治的秩序』や『こまごまとしたあらゆる人間的絆』も絶えず必要ではあっても遠くにぼやけている。経済秩序こそ何より重要であった」(158)。こうして、Keohane (1980) と同様に、ボワギルベールが成し遂げた画期的飛躍に脚光が浴びせられるのである。

要するに、自己愛という罪を(公共)善に転換する不可思議な「錬金術」(ジャン・ラフォン)を施すのは神慮にほかならないが、ボワギルベールにとってこの超越的な神慮は、しかし不可知ではない。その内実は、社会的結合システムとしての循環的相互依存のシステムに内在する市場の強制力という、利己的情念(自己愛)の対立を調整しうる安定化装置のことであり、分析可能な対象であった。こうして、自己愛が紡ぎだす自律的な経済秩序への着目によって、彼は(自由主義)経済学の形成に向けて前例の

ない大きな一歩を印したのである。

ファッカレロの研究以来、ニコルあるいはジャンセニスムからボワギルベールへの継承関係が注目されるようになったが(例えば、Latouche 2005)、ジャンセニストのなかでもとくに自然法学者のドマの影響に目を向けたのが、メソニエールである。メソニエールによれば、ドマは「法の諸原理は人間本性のなかにある」(Meyssonier 1989, 48)とし、墮罪後も人間精神のなかに残された理性の光によって人間は個人や社会を観察することで、不動の自然法をみだし、これに基づいて社会秩序を維持しようと考えた。彼女は、ここにボワギルベールの議論との驚くほどの「類似性」をみいだすことができるとし、さらにこれによって「神慮がなくても社会秩序が維持される社会の世俗化に向けて道が開かれた」(50)と評価している。

上述のように、ファッカレロは自由主義経済学の創成の視点からボワギルベールの均衡概念の析出におもな関心を向けた。最近のFaccarello and Steiner (2008)では、ボワギルベールがジャンセニスムの宗教思想から出発して最終的に到達した市場における利益の自己調整メカニズムの観念を、ケネー、チュルゴ、セーが、多様な、しかし補完的な仕方でも発展させていく次第を論じている(11)。これに対し、米田(2005)は、ボワギルベール経済学のもう一つの重要な構成要素として、彼の動態論の中核をなす消費主導論にも光をあて、彼が功利主義の富観や徹底した功利的人間観に基づいて、文明社会をいわずに交換を通じて相互的効用の実現される「欲求の体系」と捉え、生産に対する消費・消費欲求の規定性を強調した点に注目する。さらに、このような消費主導論は、18世紀を通じて受け継がれていくフランス経済学の重要な一特質であったことを明らかにしている。

一方、マンデヴィルに関しては、従来から、ニコル、ラ・フォンテーヌ、ラ・ロシュフコー、ベールなどの影響が指摘されてきた(Horne

1978; 山口 1983). ラトゥーシュは『蜂の寓話』の出現は「経済学が生まれ出る決定的瞬間をなす」(Latouche 2005, 166) とまで評価するが、ファッカレロは、マンデヴィルについては、私悪が公益に転化するためには「熟練した政治家の手際のよい管理」が必要であるとした彼の主張をおそらくは念頭に置いて、次のように述べている。「ニコルの思想およびそれによって代表されるジャンセニスムの伝統は、またマンデヴィルの著作を通じてアングロ・サクソンにおける思想的展開に影響を与えた。…一般によく取り上げられるマンデヴィルは大部分の論点でかなり後退しており、『蜂の寓話』の出版が引き起こしたスキャンダルには…根拠がないように思える」(Faccarello 1986, 157-58)。マンデヴィルとボワギルベールとは違いも大きいですが、しかし、17世紀後半のフランスの新思潮をとものに想源とする彼らの経済学には共通点も多い。

ラトゥーシュは言う。マンデヴィルもまたアウグスティヌス主義者であり、「パスカルと同じほどに極端なこのアウグスティヌス主義者は、彼がイギリスにおいて翻訳し模倣し広めたフランスのモラリスト（とくにラ・ロシュフコー）のラインにおいて正真正銘のリゴリストであるように思える」(Latouche 2005, 168)。ラフォンは次のように考える(Lafond 1996c)。マンデヴィルはしばしば「イギリスのラ・ロシュフコー」とみなされる、しかし『寓話』において、このフランスのモラリストにみられる貴族的な栄光や名誉の偽善性の暴露といった貴族的道徳の痕跡は決定的に排除されている、マンデヴィルはラ・ロシュフコーやジャック・エスプリを通じてアウグスティヌス主義を受け継いでいるばかりか、アウグスティヌス自身から直接に影響を受けており、これが彼の道徳思想を根本から規定している、それゆえ、彼は商業やアートや科学など現実の社会を動かしている動因に目を向けるとき、その動因を悪の効用（私悪は公益）という逆説を用いて説明せざるをえない。

そして善（美德）が悪（自己愛）となり悪（私悪）が善（公益）となる、このような混沌のなかに「古典的なアウグスティヌス主義の変容のなかでも格別に重要な例」をみいだせるとし、啓蒙思想を育んだのは部分的にはこのようなアウグスティヌス主義の墮落であったとしている(458)。

ボワギルベールもマンデヴィルも、アウグスティヌス主義のリゴリズムの呪縛に囚われており、マンデヴィルにおいて公益をもたらすのが「私悪」であるとすれば、ボワギルベールにおいて富の種類を増やし文明化を進めるものは「精神の墮落」にほかならない。このような逆説に、われわれはアウグスティヌス主義の墮落というよりも、むしろシニクなエピクロス主義への転換とでもいうべきその屈折をみることができよう。さらに、彼らは基本的な社会ビジョンを共有していることに注目しなければならない。すなわち、彼らはともに社会を「欲求の体系」と見立て、「私悪」によるのであれ「精神の墮落」によるのであれ、人々の諸欲求が経済社会のダイナミズムを導く原動力であると考えた。それゆえ、経済社会において、人々の相互的な諸欲求を通じて緊密に結び合った諸要素の連鎖を維持するのは、何よりも消費・消費欲求にほかならない。高度に洗練された文明社会の生産と流通のシステムを維持するのは、消費支出に用いられる貨幣の循環的流通（消費循環）であり、例えば、消費・消費欲求の減退によってこの循環が収縮すれば、このシステムは立ち行かなくなる。ここに、出現しつつある「商業社会」の「欲求の社会」としての、あるいは消費的社會としての一面が見事に捉えられていると言えよう。

以上のように、フランスの新思潮と利益説あるいは功利主義との深い繋がりが明らかにされ、そこから紡ぎ出されるボワギルベールやマンデヴィルの経済学もまた功利主義の性格を持っていることが明らかにされた。ただし、こ

のような性格は、富裕の科学を標榜する経済学のいわば本来的な性格であり、多かれ少なかれ、どんな経済学にもみいだすことができる。例えば、フォースはスミスを新ストア主義の系列に置いたが、しかしスミスの有名なビール商人の例（「われわれが自分たちの食事をとるのは、肉屋や酒屋やパン屋の博愛心によるのではなく、彼ら自身の利害に対する彼らの関心による。…」）は、『国富論』の経済世界においてスミスが、一面では、社会の結合原理を「利益」あるいは利益を求める「食欲」に求めたことを端的に示すものである。ところで、その思想的源泉はこれまでマンデヴィルに求められてきた。これに対し、ペローは、「この二世紀もの間、忘れ去られてきたが」、マンデヴィルの強欲な「宿屋の主人」のモデルは、ニコルのいう貪欲に駆られて旅人の面倒をみる「宿屋の主人 (le logeur)」であるとし、しかもこの例は、一方でボワギルベールの「居酒屋 (le cabaretier)」の例に受け継がれている事実を指摘した (Perrot 1992, 344-45)<sup>4)</sup>。ペローは、スミスの有名なフレーズの源泉をニコルにみいだすとともに、社会的な結合原理を利益にみる見方に関して、スミスとボワギルベールの想源は同じであると考えたのである。このように、自己利益の実現のために他者の利益に寄与するという利益の相互性の観念、言い換えれば「利益による秩序」の観念を彼らは共有していた。こうした利益説ないし功利主義の人間観・社会観に関するニコル → ボワギルベール・マンデヴィル → スミスの継承関係は、Faccarello (1986) や Latouche (2005) でも指摘されており、Lafond (1996a) が言うところの、パスカルやニコルからベールやマンデヴィルを経てスミスに至る「興味深い連続性」を例証するものであると考えることができよう。

## VI むすび

17世紀後半のフランスの新思潮を代表する

人物を挙げるだけでも、ジャンセニストのニコルやドマ(あるいはパスカル)、モラリストのラ・フォンテーヌやラ・ロシュフコー、リベルタンのベールなど実に多彩であり、ときにその思想的な立脚点が正反対の場合もあるほどである。この新思潮の研究は、おもに宗教思想史や文学史や哲学史の領域で行われてきたこともあって、これまで功利主義の源流として注目されることはあっても、それを経済学の生成と関連づける視点はあまりみられなかった。また、ラフォンやフォースのように、この視点から問題提起する場合でも、ボワギルベール研究など従来の経済思想史研究を必ずしも十分に踏まえていないため、可能な成果を生み出すことができていないように思える。フォースの注目すべき研究への Faccarello (2005) の異論は、この事情をよく示している。

しかしともあれ、この新思潮は、功利主義の道徳、さらには経済学の一源泉としての歴史的意義を持つことが認められるようになった。自己愛という悪は社会的効用(公益)をもたらすことで公共善に転化する。このような見方の前提は、「効用」の増大や経済的繁栄を善とみなす倫理の世俗化、言い換えれば、欲望の満足によって世俗的幸福を目指すことは罪ではないとする功利主義的なモラルの出現である。その上で、この転化を可能にする条件は何か問われることになる。それは神慮に基づく政治的秩序(ニコル)、政治家の手際のよい管理(マンデヴィル)、あるいは事実上の市場機構の作用(ボワギルベール)であったりするが、これまでみてきたように、そのような問い自体をもたらしたのは、おもにアウグスティヌス主義とエピクロス主義の邂逅であったと考えられている。ただし、とくにエピクロス主義の含意が今ひとつ明確でないこともあって、この邂逅の意味するところは不分明の印象を拭いがたい。たんに「世俗化」の現実をエピクロス主義の名によって表現しているにすぎないようにもみえる。ただ、

逆に言えば、この近代エピクロス主義と呼ばれる思潮の解明によって、捉えがたい、「世俗化」のトレンドに内在する論理に迫ることができるようにも思える。この点は、今後の課題であろう。いずれにせよ、原罪説に拠って立つアウグスティヌス主義と経済学の生成とを関連づけるこのような研究アプローチは、これまでほとんど注目されることがなかった視点から経済学の生成問題に迫ろうとするものであり、ヨーロッパ出自のこの新興科学の起源・成り立ちを究明する上で、重要な意義を担うことになった。

この研究アプローチがもたらした成果としてまず注目すべきは、ボワギルベールとマンデヴィルの経済学を同じ地平上に置いて、共通する特質を論じうる視点が与えられたことである。すでにみたように、想源を同じくする彼らは、人間の諸欲求こそが経済社会のダイナミズムを導く動因であるとする基本的ビジョンを共有していた。(消費)欲求の本源性に着目する彼らのこのビジョンは、アウグスティヌス主義のペシミスティックな人間理解に基づくが、自己愛をほとんど唯一の行動原理とするその人間像は、メナールによれば、「確かに悲観的で厳しいが、根拠があり、経験によって確認される人間像」(メナール 1989, 137)である。そうであるならば、それは、リアリズムに徹することで近代社会の一本質を鋭く抉り出していると言うことができよう。そして消費欲求や効用の視点から経済社会のダイナミズムに迫ろうとするこのような接近方法は、少なくともフランスにおいては、ムロンやフォルボネなどを経て19世紀初めのトラシやセーに至るまで、連綿と受け継がれていく(米田 2005)。

ボワギルベールとマンデヴィルは宗教の羈絆を逃れ、功利主義的な社会認識を徹底しようとしたが、しかし他方では、アウグスティヌス主義に基づくリゴリズムの人間観に囚われていたから、人間の悪が結果的に公共善をもたらすという逆説を弄せざるを得ない。それゆえ彼らの

論説にはおのずからシニシズムの影がまわりつくことになる。その後、個人的利益の追求を、世俗の幸福を求めるまっとうな願望に基づくものと考えたムロンやフォルボネの晴れやかな社会ビジョンと比べて、対照的である。単純化して言えば、人々の集合的精神における世俗的価値の優越という世俗化のトレンド(エピクロス主義)を背景として、ニコルやラ・ロシュフコーのペシミスティックなアウグスティヌス主義は、マンデヴィルやボワギルベールのシニシクなエピクロス主義に転化し、これがさらにムロン、ヴォルテール、フォルボネなどの啓蒙の功利主義に引き継がれていく、ということになる。

ところで、この新思潮のライン上にあって、功利主義や経済学の生成・展開に密接に関与したのが奢侈容認論の流れである。マンデヴィルに始まる奢侈容認論は、上の図式で言えば、シニシクなエピクロス主義から啓蒙の功利主義への流れに即応している。一方、新ストア主義であれ何であれ、このラインに批判的な論調は、大抵の場合、奢侈批判と一体をなしている。18世紀における経済学の生成と展開の全体像に迫るためには、これらの対立的な二つの傾向を合わせて検討しなければならないとすれば、奢侈論争はそのための格好の素材を提供するであろう<sup>5)</sup>。

米田昇平：下関市立大学経済学部

## 注

- 1) アウグスティヌス主義とは、教父アウグスティヌスの思想に集約される神学上の伝統主義のことであり、17世紀は「アウグスティヌスの世紀」と言われるほどに、多くの思想家・宗教家がこれを奉じた。経済学の生成との関連で注目されるべきは、フランスのカソリックの一派で、ポール・ロワイヤル修道院に結集したジャンセニストのアウグスティヌス主義(=ジャンセニスム)である。対抗宗教改革運動のなかで、

ジェズイットがルネサンス以来のユマニスム（人間中心主義）の流れに棹さして、人間的活動の相対的自律性（自由意志の可能性）を承認する方向へキリスト教をいわば世俗化していくのと対照的に、ジャンセニストはそのような時代の傾向を真っ向から批判し、むしろアウグスティヌスの原点（恩寵主義）への回帰を唱える。すなわち人祖アダムの墮罪によって原罪を背負うことになった人間の根本的墮落と無力を強調し、救いに至る道としての人間の自由意志や功績の意義を否定し、人間の救いはもっぱら恩寵によるほかはありえないと説く。そして人間の理性の力を抛り所にするあらゆる理想主義（ストアの美德、栄光の希求・英雄の賛美など）を、人間の邪悪さや無力さへの無自覚による虚飾・虚栄とみなして徹底的に批判した。

- 2) フォースは、原罪説をどの程度受け入れるかが、自己愛やその結果に関する理解を含めてあらゆる学説上の選択を決定する、と考える。例えば、新ストア的な（予定調和的な）神慮の観念とアウグスティヌス主義者の悲観的な神慮の観念を分かちラインは、一方が原罪説に忠実であり、他方はそうではないところにある。原罪を信じれば自己愛は神慮の作用によって善に変えることのできる悪であり、原罪説を否定すれば自己愛は自然の目的に役立つ穏やかな感情となる。シャフツベリー、バトラー、スミスが神慮に関してアウグスティヌス主義の観念よりも新ストア主義のそれを選んだのは、彼らが原罪説を拒否したから、あるいはそれをかなり抑制的な形で受け入れたからである。こうして、フォースによれば、「原罪は、ほとんどの啓蒙思想家による利益説の受け入れの背後に存在する言外の問題である」（Force 2003, 87）。
- 3) ジャンセニストの神学やこの時代に彼らがかわった神学論争に関する研究文献は、パスカル研究を含めて膨大で枚挙にいとまがない。ここではジャンセニスムの社会理論に多少とも踏み込んだ文献として、Bénichou (1948), Tavenaux (1965), 飯塚 (1984), メナール (1989) を挙げるにとどめる。
- 4) ニコルは言う、「田舎に行けばほとんどどこで

も喜んで旅人の面倒をみる者や、また旅人を迎えるための宿舎を準備万端整えている者たちをみかけることができる。…愛徳の精神に動かされているのだとすれば、これほど素晴らしい人々がほかによろか。しかし彼らを動かしているのは貪欲である」（Nicole [1671] 1999, 213）。ボワギルベールの場合は次の通りである。「世の中のあらゆる取引は、…もっぱら企業家の私利私欲によって支配されている。企業家は奉仕を行おうとか、取引の相手方に恩義を施そうとか考えたのでは決してなかった。旅人にぶどう酒を売る居酒屋は、だれであれ旅人の役に立とうとしたのでは決してなかったし、…旅人にしても事情は同じである」（Boisguilbert [1705] 1966, II, 748-49）。

- 5) 奢侈の是非という論点を通じて、文明、商業、富、習俗、道徳などをめぐる諸問題を集約的に問う奢侈論争は、ヨーロッパ近代の形成期を象徴する最大の論争であり、経済学の生成とも密接に関係するが、この論争への関心は、近年ますます高まっているようである。その研究動向の詳細は別に示されるべきであるが、最近のものに限定して4点だけ挙げておこう。Wahnbaeck (2004) は英仏の奢侈論争がイタリアにおける経済学の導入にどのような影響を与えたかを論じ、Hont (2006) はマンデヴィルが呈示した奢侈容認論が英仏でどのような論争を巻き起こしたかを整理している。また米田 (2005) はフランスにおける奢侈容認論の流れをたどり、その流れは18世紀を通じて維持されることを明らかにした。一方、Shovlin (2006) は、逆の視点から、フランスにおいて奢侈批判の論調と結びつく形で「シビック的徳の経済学」のトレンドが脈々と息づいていたことを明らかにしている（米田 2007 を参照）。端的に言って、奢侈論争の展開が象徴的に示しているように、ボワギルベールやマンデヴィル以降の経済学・経済思想は、一面では、アウグスティヌス主義のリゴリズムを払拭しつつ、功利主義的なリアリズムと、新ストア主義的な、あるいはシビック的な理想主義とのせめぎ合いのうちに展開していくようにもみえる。

## 参考文献

- Bénichou, P. 1948. *Morales du grand siècle*. Paris: Gallimard. 朝倉剛・芳賀賢二訳『偉大な世紀のモラル—フランス古典主義文学における英雄的の世界像とその解体』法政大学出版局, 1993年.
- Berger, G. 1981. Les origins du libéralisme: Pierre Nicole. *Commentaire* 14:275–84.
- Boisguilbert, P. de. [1705] 1966. Factum de la France, contre les demandeurs en delay . . . In *Pierre de Boisguilbert ou la naissance de l'économie politique*, 2 vols. Paris: L'Institut National d'Études Démographiques: 741–98.
- Dumont, L. 1977. *Homo aequalis. Genèse et épanouissement de l'idéologie économique*. Paris: Gallimard.
- Faccarello, G. 1986. *Aux origines de l'économie politique libérale: Pierre de Boisguilbert*. Paris: Édition Anthropos. *The Foundations of Laissez-faire. The Economics of Pierre de Boisguilbert*. London and New York: Routledge, 1999 (英訳改訂版).
- . 2005. A Tale of Two Traditions: Pierre Force's *Self-interest before Adam Smith*. *European Journal of the History of Economic Thought* 12 (4): 701–12.
- Faccarello, G. and P. Steiner. 2008. Interest, Sensationism and the Science of the Legislator: French 'philosophie économique' 1695–1830. *European Journal of the History of Economic Thought* 15 (1): 1–23.
- Force, P. 2003. *Self-interest before Adam Smith: A Genealogy of Economic Science*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- . 2005. Two Concepts of Providence and Two Concepts of Pity: A Reply to Gilbert Faccarello and Jimena Hurtado. *European Journal of the History of Economic Thought* 12 (4): 723–31.
- Hazard, P. 1935. *La crise de la Conscience européenne (1680–1715)*. 野沢協訳『ヨーロッパ精神の危機 1680–1715』法政大学出版局, 1973年.
- Hecht, J. 1966. La Vie de Pierre Le Pesant, seigneur de Boisguilbert. In Boisguilbert 1966, I.
- Heilbron, J. 1996. French Moralists and the Anthropology of the Modern Era: On the Genesis of the Notions of 'Interest' and 'Commercial Society.' In *The Rise of the Social Science and the Formation of Modernity*, edited by J. Heilbron, L. Magnusson, and B. Wittrock. Dordrecht, Boston and London: Kluwer Academic Publishers.
- Hirschman, A. O. 1977. *The Passions and the Interests: Political Arguments for Capitalism before Its Triumph*. Princeton: Princeton Univ. Press. 佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』法政大学出版局, 1985.
- Hont, I. 2006. The Early Enlightenment Debate on Commerce and Luxury. In *The Cambridge History of Eighteenth-Century Political Thought*, edited by M. Goldie and R. Wokler. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Horne, T. A. 1978. *The Social Thought of Bernard Mandeville: Virtue and Commerce in Early Eighteenth-Century England*. London and Basingstoke: Macmillan. 山口正春訳『バーナード・マンデヴィルの社会思想—18世紀初期の英国における徳と商業』八千代出版, 1990年.
- Hurtado, J. 2005. Pity, Sympathy and Self-interest: Review of Pierre Force's *Self-interest before Adam Smith*. *European Journal of the History of Economic Thought* 12 (4): 713–21.
- James, E. D. 1972. *Pierre Nicole, Jansenist and Humanist: A Study of His Thought*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Keohane, N. O. 1980. *Philosophy and the State in France: The Renaissance to the Enlightenment*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- Kley, D. V. 1988. Pierre Nicole, Jansenism, and the Morality of Enlightened Self-interest. In *Anticipations of the Enlightenment in England, France, and Germany*, edited by A. C. Kors and P. J. Korshin. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press.
- Lafond, J. 1992. Préface. In *Moralistes du XVII<sup>e</sup> siècle*, édition établi sous la direction de Jean Lafond. Paris: Robert Laffont.
- . 1996a. De la morale à l'économie politique, ou de La Rochefoucauld et des moralistes à Adam Smith par Malebranche et Mandeville. *Da la morale à l'économie politique*, Dialogue Franco-Américain sur les Moralistes Français. Actes du colloque de Columbia University (1994). Textes réunies et présentées par P. Force et D. Morgan. Pau: Publications de l'Université de Pau: 187–96.
- . 1996b. Augustinisme et Épicurisme au XVII<sup>e</sup> siècle. In *L'homme et son image, Morales et littérature de Montaigne à Mandeville*. Paris: Honoré

- Champion: 345–68.
- . 1996c. Mandeville et La Rochefoucauld, ou des avatars de l'augustinisme. In *L'homme et son image, Morales et littérature de Montaigne à Mandeville*. Paris: Honoré Champion: 441–58.
- Latouche, S. 2005. *L'invention de l'économie*. Paris: Albin Michel.
- Marcel, R. 1957. Du jansénisme à la morale de l'intérêt. *Mercur de France* 330:238–55.
- Meyssonnier, S. 1989. *La Balance et l'Horloge, la genèse de la pensée libérale en France au XVIII<sup>e</sup> siècle*. Paris: Les Éditions de la Passion.
- Nicole, P. [1671] 1999. De la grandeur. In *Essais de morale*. Choix d'essais introduits et annotés par Laurent Thirouin. Paris: Presses Universitaires de France: 197–243.
- Perrot, J.-C. 1992. La main invisible et le Dieu caché. In *Une histoire intellectuelle de l'économie politique, XVII<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup>*. Paris: Éditions de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales: 333–56.
- Robertson, J. 2005. *The Case for the Enlightenment: Scotland and Naples 1680–1760*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Rothkrug, L. 1965. *Opposition to Louis XIV: The Political and Social Origins of the French Enlightenment*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- Shovlin, J. 2006. *The Political Economy of Virtue: Luxury, Patriotism, and the Origins of the French Revolution*. Ithaca and London: Cornell Univ. Press.
- Taveneaux, R. 1965. *Jansénisme et politique*. Paris: Armand Colin.
- Thirouin, L. 1999. Introduction. In Nicole 1999.
- Wahnbaeck, T. 2004. *Luxury and Public Happiness: Political Economy in the Italian Enlightenment*. Oxford: Clarendon Press.
- 飯塚勝久. 1984. 『フランス・ジャンセニズムの精神史的研究』 未来社.
- 奥田 敬. 2007. 「書評：John Robertson, *The Case for the Enlightenment: Scotland and Naples 1680–1760*」 『経済学史研究』 49 (2): 96–97.
- メナール, J. 1989. 「恩寵の神学と人間学」 『思想』 3:134–44.
- 八幡清文. 2006. 「書評：Pierre Force, *Self-Interest before Adam Smith*」 『経済学史研究』 48 (1): 167–69.
- 山口正春. 1983. 「バーナード・マンデヴィルとフランスの道徳的伝統」 『政経研究』 (日本大学) 20 (2): 133–64.
- 米田昇平. 2005. 『欲求と秩序—18世紀フランス経済学の展開』 昭和堂.
- . 2007. 「書評：John Shovlin, *The Political Economy of Virtue: Luxury, Patriotism, and the Origins of the French Revolution*」 『経済学史研究』 49 (2): 100–01.